道徳科研修資料 vol:8 ：「よい授業」と「上手な授業」

後藤　忠 2018.8.4

この2つは似て非なるものがある。

よい授業の反対は「悪い授業」、上手な授業の反対は「下手な授業」である。

「上手な授業」即「よい授業」とは限らず、「下手な授業」即「悪い授業」とは限らない。

よい授業で、しかも上手な授業であるに越したことはないが、悪い授業で、しかも下手な授業では最悪である。その中間に位置付く「下手な授業だがよい授業」と「上手な授業だが悪い授業」とでは、どちらに価値があると言えるだろう？

言うまでもなく「下手な授業だがよい授業」の方である。

では、よい道徳授業とはどんな授業のことか？

それは教師と子供と教材とが三つ巴になって響き合っている授業のことである。子供の道徳性は子供が道徳の学習に興味・関心をもち、夢中になっ学習に取り組む中で育まれるものだからだ。

よい道徳授業のための五か条

第一条　教師と子供の信頼関係、子供相互の良好な人間関係をつくる

①一人一人が尊重され、人格の自由が保証されている。

②相互理解に努め、失敗や過ちを許し合う寛容の雰囲気がある。

③個々の役割と責任が明確で、互いに助け合い協力し合う雰囲気がある。

④公正で公平な平等原理が確立している。

⑤集団生活の秩序が確立している。

安心、安全の学級の中で子供の道徳性は豊かに育つ。

第二条　よい教材を使用する

教材は子供の心（内面）を映し出す鏡であり、生き方の糧となるものである。よい教材は子供の心を鮮明に映し出す。教材は道徳授業の命といえる。

第三条　「本時のねらい」を鮮明に立てる

「本時のねらい」は授業の出口を示すもの。具体的で鮮明なねらいを立てる。ねらいが曖昧だと授業がぶれる。

第四条　主題設定の理由（授業者の指導観）を深める

授業者の指導観は授業を支える基盤（土台）である。それは授業の奥にあって表からは見えない。その見えないものが根底から授業を支える。

「教師の価値観、児童観、教材観」を深めよう。

第五条　徹底して「待つ、聴く、受け止める」姿勢で授業に臨む

教えるのではなく、引き出すという指導観に立つ。

できるできない、分かる分からないを問題にせず、今までより少しだけ自己を深く見つめることができるようになる、それが道徳性の深まりということができる。